CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.171, July 2026

目次

〈おしらせ〉 1

〈2026年度　CAPSメンバー紹介〉 2-3

〈2026年度　研究プロジェクト一覧〉 3-4

〈受け入れ図書紹介〉 4-6

〈CAPS企画の報告〉

CAPS主催講演会
「21世紀アメリカ安全保障政策の政治経済学」報告
CAPS主任研究員　韓 相一 7

〈CAPS叢書紹介〉

庄司 宏子 編著『＜災害＞文学の可能性』(作品社、2026年)
文学部 教授　庄司 宏子 8

〈シリーズ　本を読む〉

ウィル・ハリス著、プレシ南日子訳『環境再生型［リジェネラティブ］農業の未来 食の安全、地域再生、気候変動を同時に解決する』(山と溪谷社、2024年)
国際共創学部 専任講師　三宅 良尚 9

〈CAPS活動報告〉 10

おしらせ

アジア太平洋研究センターでは以下のイベントの開催を予定しております。皆さまのご参加をお待ちしております。



2026年度　CAPSメンバー紹介

所長・企画執行委員会委員長：経済学部 永野 護

所員・企画執行委員（任期1年）

経営学部 調 勇二（新任）　理工学部 門内 隆明（新任）

文 学 部 日比野 啓（再任）　法 学 部 崎濱 紗奈（新任）　国際共創学部 三宅 良尚（新任）

研究員：主任研究員 韓 相一　ポスト・ドクター ROCHA Joanes　今田 風人

事務室：課長 北原 仁　村木 碧唯　細本 有理子　横山 未美子　小笹 有理

【所員・企画執行委員】



経営学部　調 勇二：今年度よりCAPSの所員・企画執行委員を務めます、経営学部の調です。専門は財務会計、コーポレートファイナンス、企業ディスクロージャーです。近年は、統合報告やESG指標連動型役員報酬制度を主な関心領域として、日本企業の情報開示やガバナンスが企業評価や投資家行動に及ぼす影響を研究しています。CAPSの活動を通じて、学部横断的な知的交流と研究の発展に貢献できればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



理工学部　門内 隆明：新任で所員を務めます、理工学部の門内です。専門は物理学で、ミクロな要素が多数集まった系の非平衡過程について、非平衡統計力学に取り組んでいます。この度、2026年度4月よりアジア太平洋研究センターの所員となりました。アジア太平洋研究センターが取り扱っているプロジェクトについて、理工学部への紹介などを適宜行っていければと思っています。よろしくお願いいたします。



文学部　日比野 啓：文学部の日比野啓です。今年度所員に再任されました。専門は演劇学。20世紀合衆国の音楽劇と日本近現代劇がおもな研究対象で、これまで『アメリカン・ミュージカルとその時代』（青土社、2020）、『三島の子どもたち』（白水社、2020）、『「喜劇」の誕生――評伝・曾我廼家五郎』（白水社、2024）という三冊の単著を上梓してきました。本センターの重要な役割の一つに、プロジェクトへの助成を通じての教員の研究奨励があると考えています。私自身これまで複数回の助成を受けて研究を進めることができました。その恩に報いるべく所員としての責務を果たしたいです。



法学部　崎濱 紗奈：新任の崎濱です。近代以降、資本主義という動態が人々の精神史にどのような変革・影響をもたらしたのかという関心のもと、沖縄近現代思想史を研究しています。帝国主義／植民地主義がもたらした文化（＝政治・経済・社会の総体を表象するものとしての「文化」）的影響に特に注目してきました。学内外において有機的な交流を促進してきたCAPSに、自身の立場から貢献できるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



国際共創学部　三宅 良尚：国際共創学部に今年度着任し、所員を務めます三宅です。専門は農業・農村地理学で、社会経済的側面に着目し、経済地理学や政治生態学の視点から調査･分析を行ってきました。ハワイ大学マノア校大学院在学中には、イースト･ウェスト・センターのアフィリエイト、日本研究センターの大学院生フェローとして活動したため、改めてアジア太平洋地域の研究にもアンテナを張りたいと思っています。何卒よろしくお願いいたします。

【主任研究員】



韓 相一：2024年からCAPSのポスト・ドクターとして勤めさせていただき、今年度から主任研究員として従事しております、韓 相一（ハン サンイル）と申します。私は、近代の日韓政治外交の歴史を中心に研究を進めております。CAPSのさらなる発展を目指して、センターの企画や研究活動の支援に尽力してまいりまので、どうぞよろしくお願いいたします。

【ポスト・ドクター】



ROCHA Joanes：今年6月からCAPSのポスト・ドクターとして勤務させていただきます、ホッシャ・ジョアネスと申します。建築史家として、これまで一貫して16～18世紀の東アジアにおける南蛮文化と建築空間の事例をもとに、日・中・欧の文化交流に関する総合的な研究に取り組んでまいりました。複数の言語を扱えることを活かし、CAPSの業務においても海外への情報発信などで貢献できればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。



今田 風人：今年度よりポスト・ドクターとして勤務いたします、今田風人と申します。専門は明治期の海事法制史で、19世紀から20世紀にかけての海事法の国際的統一の潮流を日本がどのように受け止め、自らの海事法制に反映していったのかにつき研究しています。ホルムズ海峡問題など、アジア･太平洋を巡る国際情勢の複雑化が著しい昨今、CAPSでの勤務を通じて現代的な問題関心を培っていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

2026年度　研究プロジェクト一覧

共同研究プロジェクト　Collaborative Projects	
研究題目 Research Theme	ファンの心理と行動に関する研究 Research on Psychology and Behaviors of Fans
責任者 Leader	上田 泰（経営学部教授） Yutaka Ueda, Professor, Faculty of Business Administration
サブ責任者 Sub-Leader	吉見 憲二（経営学部教授） Kenji Yoshimi, Professor, Faculty of Business Administration
研究期間（年度） Years	2024 ～ 2026
目　的 Purpose	ファンの心理や行動に焦点を当てて、それらに対する先行要因や結果との関係を実証的に解明する。 This study aims to focus on psychology and behaviors of fans toward their favorite objects such as animated characters, sport players and idols, and examine the relationships of this psychology and behaviors with their antecedents and consequent factors.
研究題目 Research Theme	神川彦松日記の学際的研究 Research on Diary of Kamikawa Hikomatsu
責任者 Leader	樋口 真魚（文学部准教授） Mao Higuchi, Associate Professor, Faculty of Humanities
サブ責任者 Sub-Leader	有富 純也（文学部教授） Junya Aritomi, Professor, Faculty of Humanities
研究期間（年度） Years	2025 ～ 2027
目　的 Purpose	日本における外交史・国際政治学の泰斗である神川彦松の59冊に及ぶ新出日記の学際的・総合的分析 Interdisciplinary and comprehensive analysis of newly discovered 59 volumes of diaries by Kamikawa Hikomatsu, a historic Japanese academic in the field of diplomatic history and international politics.

パイロット研究　Pilot Projects	
研究題目 Research Theme	大学生の留学準備：ポジティブ心理学と森田療法を用いた留学準備プログラム Preparing University Students for Study Abroad: A Pre-Study Abroad Program Using Positive Psychology and Morita Therapy
責任者 Leader	ヴェラスコ 團志郎（国際共創学部准教授） Danshiro Velasco, Associate Professor, Faculty of Global Studies and Sustainability
目　的 Purpose	留学を計画している大学生を対象に考案されたメンタルヘルス支援システムの有効性を検証する。 To examine the effectiveness of a mental health support system designed for university students planning to study abroad.
研究題目 Research Theme	『西国立志編』の思想史的考察：儒者のSelf Help理解 A Study of Saigokurisshihen in the Context of Intellectual History: Confucian Understanding of Self Help
責任者 Leader	李 セボン（法学部教授） Saebom Lee, Professor, Faculty of Law
目　的 Purpose	Self Helpと『西国立志編』の対照作業を通じて中村正直の思想におけるSelf Help理解の深層を分析することで、明治日本思想史における儒学と通俗道徳論との関係を解明する。 By comparing Self Help and Saigokurisshihen, this study aims to elucidate the relationship between Confucianism and popular moral theory in the history of Meiji Japanese thought.

受け入れ図書紹介

CAPSでは毎年、アジア太平洋地域に関する多様なテーマで図書を受け入れています。成蹊大学図書館OPACから検索できます。学生・教職員とも資料の貸出が可能です（要学生証・教職員証）。

書　名	著　者	出版社	発行年
アメリカ移民難民法の改革	ビル・オン・ヒン 著 宮川 茂雄 訳	丸善出版	2025年
ガザについて歴史は何を語りうるか	エンツォ・トラヴェルソ 著 他	青土社	2025年
ジェンダー史入門	アントワネット・バートン 著 他	勁草書房	2025年
トランスジェンダーの生活史	宮田 りりぃ	晃洋書房	2025年
ナショナル韓流とトランスナショナル韓流	辛 教燦	博英社	2025年
パレスチナ実験場	アントニー・ローウェンスティン 著 他	岩波書店	2025年
ミャンマー、優しい市民はなぜ武器を手にしたのか	西方 ちひろ	ホーム社	2025年
リベラルなアメリカの「失われた魂」たち	山本 貴裕	彩流社	2025年
移民がむすぶ日本と南米の歴史	ファクンド・ガラシーノ、 高木 佳奈 編	東京大学出版会	2025年
塩政・関税・国家―近代中国の徴税と社会	岡本 隆司	名古屋大学出版会	2025年
家父長制以後	エリック・マセ 著 山下 雅之 訳	法政大学出版局	2025年
韓国・朝鮮の近現代史と日本	李 熒娘 編著	中央大学出版部	2025年
教師の権利保障と労働運動： 社会変革に向けた韓国教員組合の歩み	鄭 修娟	九州大学出版会	2025年
近代中国思想の執拗低音　歴史の考え方を振り返る	王 汎森 著 佐藤 仁史 訳	東方書店	2025年
近代中日思想文化交渉史研究	劉 岳兵 著 白 春岩 訳	晃洋書房	2025年

書　名	著　者	出版社	発行年
形似神異　～中日伝統政治文化の系譜～	葛 兆光 著 他	志学社	2025年
現代ロシアの歴史認識論争	西山 美久	慶應義塾大学出版会	2025年
現代韓国の軌跡	文 京洙 編 他	晃洋書房	2025年
現代中国という問い ―辛亥革命から「中国の夢」まで	村田 雄二郎	晃洋書房	2025年
現代中国女性のライフコース	陳 予茜	青弓社	2025年
現代東南アジア政治	岡本 正明 編著 他	法律文化社	2025年
穀物の近代東アジア経済史	篠根 拓人 前田 廉孝	慶應義塾大学出版会	2025年
新装版　近世蔵書文化論 ―地域〈知〉の形成と社会	工藤 航平	勉誠社	2025年
世界史の中の「ガザ戦争」	藤田 進 編	大月書店	2025年
前近代イスラーム社会と〈同性愛〉	辻 大地	九州大学出版会	2025年
大石正巳の奮闘	片山 慶隆	創元社	2025年
大地からの中国史	大澤 正昭	東方書店	2025年
中国の女性演劇　―越劇とジェンダー	中山 文	勉誠社	2025年
中東ユーラシアから世界を読む	青木 健太 他	岩波書店	2025年
中東政治史	末近 浩太 編著 他	法律文化社	2025年
朝鮮の国家形成と東アジア	武田 幸男	勉誠社	2025年
朝鮮現代史論	林 哲	法政大学出版局	2025年
帝国と民族のあいだ ―パレスチナ／イスラエルの重層性	鶴見 太郎 今野 泰三 編	東京大学出版会	2025年
帝国日本の監獄行政 ―植民地台湾と朝鮮を中心に	林 政佑	京都大学出版会	2025年
天下の「逸民」　革命の「新民」	斉 金英	勁草書房	2025年
道教文化と日本　陰陽道・神道・修験道	日本道教学会 編	勉誠社	2025年
日韓スタディーズ②「日韓」を超えて	李 里花	ナカニシヤ出版	2025年
日清戦争・「三国干渉」と帝国主義「中国分割」	佐藤 公彦	ゆまに書房	2025年
日米同盟史	山口 航 編著 他	法律文化社	2025年
日本の植民地統治と台湾人認識	周 俊宇 著 川島 真 監修・校訂	東京大学出版会	2025年
日露戦争	千葉 功	吉川弘文館	2025年
日露戦争と日本像の転換	飯倉 章	吉川弘文館	2025年
復刻版『移住家族』　第1回配本（第1,2巻）	長尾 直洋	不二出版	2025年
福祉の世界史	金澤 周作 編 他	有斐閣	2025年
満州移民とブラジル移民	森 武麿	不二出版	2025年
毛沢東時代の統治と民兵	高 暁彦	名古屋大学出版会	2025年
黎明期の活字出版 ―和装活版本から文学書肆春陽堂の成立	山田 俊治	勉誠社	2025年
統治されない技法　―太湖に浮かぶ〈梁山泊〉	太田 出	京都大学出版会	2024年
清代北京の首都社会	堀地 明	九州大学出版会	2023年

書　名	著　者	出版社	発行年
古典インドの議論学 —ニヤーヤ学派と仏教徒との論争—	須藤 龍真	九州大学出版会	2022年
戦後日本文化再考	坪井 秀人 編著	三人社	2019年
Allies at War: How the Struggles between the Allied Powers Shaped the War and the World	Bouverie, Tim	Crown Publishing Group, Division of Random House Inc	2025年
Empire of Officials: Christians and Jews in the Ottoman Bureaucracy	Kirmizi, Abdulhamit	I.B. Tauris	2025年
Mirages of Reform: The Politics of Elite Protectionism in the Arab World	Monroe, Steve L.	Cornell University Press	2025年
Ottoman Nationalism in Transition from Empire to Republic, 1908-1931 (Modernity, Memory and Identity in South-east Europe)	Simsek, Abdullah	Palgrave Macmillan	2025年
Our Dear Friends in Moscow: The inside Story of a Broken Generation	Borogan, Irina/ Soldatov, Andrei	Public Affairs, U.S.	2025年
The Great War and the Transformation of Habsburg Central Europe (The Greater War)	Judson, Pieter M./ Zahra, Tara	Oxford University Press	2025年
The Party's Interests Come First: The Life of XI Zhongxun, Father of XI Jinping (Stanford-hoover Series on Authoritarianism)	Torigian, Joseph	Stanford University Press	2025年
Tomorrow Is Yesterday: Life, Death, and the Pursuit of Peace in Israel/Palestine	Agha, Hussein/ Malley, Robert	Farrar, Straus & Giroux Inc	2025年
Chequered Past, Uncertain Future: The History of Pakistan	Kamran, Tahir	Reaktion Books	2024年
Richer and More Equal: A New History of Wealth in the West	Waldenstrom, Daniel	Polity Press	2024年
Britain, Japan and China, 1876–1895: East Asian International Relations before the First Sino-Japanese War	Yu, Suzuki	Routledge	2022年
War by Other Means: Geoeconomics and Statecraft	Blackwill, Robert D./ Harris, Jennifer M.	The Belknap Press	2017年

CAPS企画の報告

CAPS主催講演会「21世紀アメリカ安全保障政策の政治経済学」報告

CAPS主任研究員　韓 相一

2026年4月13日に成蹊大学アジア太平洋研究センター（CAPS）主催講演会「21世紀アメリカ安全保障政策の政治経済学（The United States' Global Role in the 21st Century）」が大学8号館202教室で開催された。本講演会は永野護所長が開会の挨拶を務め、スティーヴン・ブルックス氏（Stephen G. Brooks、米国・ダートマス大学教授）にご講演いただいた。本講演は、同氏の著書二冊の内容を中心に行われた。

はじめに、ブルックス氏は、著書“Command of Commerce”において、①米中間の経済力格差はほぼ消滅していること、②米中は経済的に深く結びついており、アメリカが自国に損害を与えずに中国を経済的に封鎖することは不可能であること、という広く信じられている2つの「常識」に挑戦したと述べる。前者については、20年分のデータを収集・分析した結果、実際の中国の経済規模はアメリカの約半分に過ぎないと指摘した。後者についてはほぼ誤りであり、アメリカが同盟国とともに中国を封鎖する場合、中国の損害はアメリカの8～11倍に及ぶと述べた。なお、本書の目的は特定の政策を提言するものではなく、経済的な実態に迫ることにあると強調した。

続いて、各論の詳細についての説明があった。ブルックス氏は、各国の主要な経済指標が正確に測定されていないという問題を取り上げた。その最も顕著な例が中国のGDPである。中国のGDP統計がどの程度誇張されているのか、またいつからそうなのかという問いに、誰も体系的に答えてこなかったと指摘する。ブルックス氏は、製造業全体を一括りに測定することは大きな誤りであるとした。製造品には「複雑性」の高低があり、複雑性の高い製品こそが経済的生産性・繁栄、および軍事的安全保障と深く結びついている。反面、中国は高複雑性製品を自力で製造する能力が十分ではない。製造業全体のシェアで見ると中国はアメリカの約2倍だが、ハイテク製品のみに絞るとアメリカが中国の2倍となる。さらに、同氏は世界上位2,000社を27セクターに分類し、各セクターで最も利益を上げている国の企業を分析した結果、①アメリカの圧倒的優位、②中国の限定的な強み、③ハイテク産業における日本・韓国・台湾の重要性、④アメリカとその同盟国企業に大きく依存している中国の構造的脆弱性が明らかになったと説明した。


スティーヴン・ブルックス氏

最後にウィリアム．C．ウォルフォース氏との共著の“America Abroad: The United States' Global Role in the 21st Century”において、アメリカが世界への関与を弱める場合、①核拡散の加速、②大規模戦争のリスク増大、③各種の国際協力の減退、④アメリカの経済成長の鈍化といった問題が起こるだろうと分析した。したがって、アメリカが同盟を維持することは、アメリカ自身の安全保障上・経済安全保障上の利益に直結するものであり、平時・有事を問わず中国に適切に対処するためにも、アメリカは同盟国と連携し続けることが不可欠であるという。ブルックス氏は「アメリカには同盟国が必要である」という結論がさらに強固なものになったと述べ、アメリカの同盟国がアメリカを説得し、同盟からの離脱を防ぐよう働きかけることへの期待を示し、講演を締めくくった。

講演後の質疑応答では、多数の質問が寄せられた。現状アメリカの同盟国がトランプ大統領を説得することは難しいのではないか。またアメリカ国内で説得することはできないかという質問に対して、ブルックス氏は、アメリカの同盟国はなぜ同盟がアメリカにとって有益なのかを積極的に説明すべきであると述べた。つぎに、海上封鎖以外の形で中国経済を遮断するシナリオとはどのようなものか。また、中国経済を遮断した場合、同盟国の経済にいかなる影響が及ぶのかという質問に対しては、トランプ大統領は二国間交渉のほうが交渉力を有すると考えているが、現在のグローバル化および複雑な生産構造のもとでは、同盟国の協力を得たほうが効果的であるとの見解を示した。

CAPS叢書紹介

庄司 宏子 編著『＜災害＞文学の可能性』(作品社、2026年)

文学部 教授　庄司 宏子

本書は戦争、ホロコースト、ジェノサイド、奴隷制度から気候変動まで、人間が体験してきた様々な〈災害〉を描く、日本文学、ポーランド文学、英語圏文学、アメリカ文学からペルーの民衆芸術まで、時代・地域・語圏を横断する論考を収めています。〈災害〉文学を論じることは、2001年のアメリカ同時多発テロや2011年の東日本大震災、2020年に始まる新型コロナウイルスのパンデミックなどを経て、世界の各地で起こった災害を描く文学が現れてきていること、また災害とその記憶をめぐる歴史の掘り起こしやメモリー・スタディーズなどの批評理論が登場しているという現代の状況に即しています。



英語で〈災害〉を意味する“disaster”は、ラテン語の「星」を意味する“astrum”に由来し、「幸運の星から離れて」が原義です。従って、“disaster”とは元々は人知を超えた力によって引き起こされる、暴風や洪水、地震などの自然の力が原因となる災害を指していました。しかし本書が捉える〈災害〉は、自然か人為かの線引きはしていません。現在の災害は、たとえ自然が引き金となっていても、その影響は社会に放置されてきた不平等や不正なシステムと結びついて人災となり、線引きは不可能だからです。またマイケル・ロスバーグが『多方向の記憶』で論じているように、ホロコーストの記憶が奴隷制度や他のジェノサイドの記憶を呼び起こすなど、災害の記憶は特定の民族のアイデンティティや時間や空間を超えて互いに呼応・共振します。東日本大震災が広島と長崎への原爆投下を呼び起こし、インドのボパール化学工場事故が日本の水俣病の公害病を呼び覚ますというように、〈災害〉とその記憶は地下茎のように繋がっており、個々の現象を見ることでは窺いづらい〈災害〉の根底に存在する暴力の構造を見るよう我々に問いかけています。

また本書は、文学に可能な〈災害〉の記憶とは何かというテーマも含んでいます。国家や共同体といった集合体の〈大きな〉記憶は災害からの復興や再生というナラティブに傾きがちですが、災害を経験した人間の〈小さな〉記憶はその後の時間と空間に堆積し続けます。文学は、レジリエンスという言葉に回収されない災害の記憶を物語として提示します。ロブ・ニクソンはその著『緩慢な暴力』で、災害には人間が生きる時間を遥かに超えて持続し、メディアで報じられないものがあると述べています。そうした災害の場合は、文学がその記憶を後世に伝える最後の砦となります。東日本大震災のように記憶がまだ新しい災害では、被災者ではなく、また被災地を訪れたことがない作者が想像で描いた作品に対して批判が起こることがありました。しかし、震災文学では被災者がその生の声を通りすがりの第三者に託して語ってもらうという、「聞き語り」の記録文学が登場しました。文学は災害に対する「当事者性」を乗り越えて記憶を継承することができるのです。

最近では、政権や権力による過去の災害記憶の消去や抑圧という事例も多々起こっています。トランプ政権は「偉大なアメリカ」に即した歴史しか認めないという行政命令を出し、スミソニアン博物館に「虚偽の歴史観で汚染する」「不適切なイデオロギー」に基づく展示を排除するよう命じています。また愛国主義を謳う歴史教育を擁護して、「奴隷たちは鍛冶や石工、農業などの技術を身につけることができた」と奴隷制度が奴隷とされた人々に利益をもたらしたとする発言が政治家によってなされています。

歴史を改竄し、人々の現実認識を歪め、権力者に都合がよい方向へと誘導する昨今の風潮、権力と結びついた偽情報・誤情報によって事実や真実が攻撃される時代にあって、〈災害〉文学は記憶継承に留まらず、どのような社会の姿や価値観をわれわれは選び取るのかという真摯でかつ不可欠な思考へと繋げることができるのではないでしょうか。それこそが文学がもつ可能性だろうと思います。

シリーズ　本を読む

ウィル・ハリス著、プレシ南日子訳『環境再生型[リジェネラティブ]農業の未来 食の安全、地域再生、気候変動を同時に解決する』(山と溪谷社、2024年)

国際共創学部 専任講師　三宅 良尚

本書では、米国ジョージア州ブラフトンでリジェネラティブ農業・放牧に取り組む著者が自身、家族、そして、農場の移り変わりから、リジェネラティブ農業の実情と、今後について意気軒高に語っている。本書の構成は、著者の曽祖父による農場の立ち上げからリジェネラティブ農業に取り組むまでの経営の変遷を描く第1部、リジェネラティブ農業および動物福祉に基づく畜産の実践過程を記述した第2部、炭素貯留の詳細やリジェネラティブ農業の拡大に関する展望を論じる第3部からなる。序章では、本書の目的が示されるとともに、農業経営をはじめ、家族、従業員、地域に対して著者が重視する原則が示されている。家畜については、「飼育している動物たちに敬意を持って接し、彼らの尊厳を守り、本能的に行動できる環境を提供すること」が掲げられている。また、農場と周辺の自然については、「自然のサイクルを観察し、そのサイクルを阻害しない方法を学ぶこと」が基本原則として示されている。第1章では、著者が農場を案内するかのように、その概要を紹介している。農場は約6.4キロメートル×約1.6キロメートルの規模をもち、約10種類の家畜が生産されている点も明らかにされる。第2章では、農場の歴史的発展と、著者が農場経営を自身で継承する経緯が解説されている。とりわけ、父親の代には農業経営の専門化が進み、農薬やトウモロコシを含む飼料の導入によって、農場が工業型農業に組み込まれていった状況が記述されている。第3章では、著者自身を含め、農業経営が工業型農業とそれを主導する企業に取り込まれ、そこから抜け出しにくくなっていく過程が詳しく描かれている。第4章では、農場を脱工業化し、リジェネラティブ農業へと転換していく過程が説明されている。第5章では、人道的家畜愛護と訳されるヒューメイン・ファーム・アニマル・ケアに注目し、実演販売をしながら、販路を確保・拡大していった話が紹介されている。第6章では、食肉加工への参入が農場経営を安定させると同時に、地域で約200の雇用を生み出し、地域活性化に貢献した過程が述べられている。第7章では、リジェネラティブ農業への転換の難しさが改めて述べられ、転換初期のキャッシュフローの問題などが論じられている。第8章では、ソーラーファームにおける牧羊、そして、農場の脱炭素やエコロジカルな利点などを数値化する取組みを紹介している。第9章では、リジェネラティブ農業の拡大と、その展望が語られている。



本書で最も印象深いのは、著者が所有する農場に関する生命にあふれた描写である。温暖なジョージア州南部に位置するこの農場では、炭素を多く含む保水力の高い土壌が発達し、草木が豊かに成長し、牛をはじめとする家畜が放牧され、200人近い従業員が働いている。その描写からは、農場に満ちる濃密な自然環境、生命が生き生きと想像される。私自身、環境にやさしい農業を実践する生産者と話す際、作業の大変さと同時に自然に対する悦びを感じることがある。本書は、そうした農業者との対話経験と響き合いながら、生産者が抱く自然観により深く寄り添う契機を研究者に与えてくれる。

また、本書を読む際に留意すべき点として、リジェネラティブ農業と並んで論じられる工業型農業の扱いが挙げられる。著者は工業型農業の元実践者として、両者を丁寧に説明するとともに、さまざまな認証制度や環境にやさしい農業をめぐる呼称にも注意を向けている。これは、リジェネラティブ農業を説明するにあたり、単純な視点にとどまらず、異なる立場や背景からの把握を促すことを意図したものである。さらに著者は、消費者に対して身近な農場を訪問し、生産方法について主体的に問いかけることを勧めている。農業が多角的に展開される今日においては、一つの農業を理解するに当たり、他の農業との関係の中で誠実に学ぶ姿勢が求められているのである。

CAPS活動報告（2026.3.16 ～ 2026.6.15）

1. 公開講演会、研究会等

～ ONLINE CAPS CINEMA 2025 ～
＜多様なテーマの6作品がオンデマンドで視聴可能＞

期　　間	2025年5月1日（木）～2026年3月31日（火） ※期間延長2026年4月1日→4月30日
対　　象	学内者 先着のべ300名
作 品 名	『女を修理する男』 『ガザ・サーフ・クラブ』 『ゴースト・フリート 　知られざるシーフード産業の闇』 『戦地で生まれた奇跡のレバノンワイン』 『パブリック・トラスト』 『バベルの学校』
配給会社	ユナイテッドピープル（株）

～ ONLINE CAPS CINEMA 2026 ～
＜多様なテーマの6作品がオンデマンドで視聴可能＞

期　　間	2026年5月1日（金）～2027年3月31日（水）
対　　象	学内者 先着のべ300名
作 品 名	『ヴィック・ムニーズ/ごみアートの奇跡』 『LIGHT UP NIPPON 　―日本を照らした奇跡の花火―』 『ザ・ニュー・ブリード』 『戦地で生まれた奇跡のレバノンワイン』 『バーバラ・リーの闘い 　～権力を恐れず真実を～』 『私は憎まない』
配給会社	ユナイテッドピープル（株）

～ CAPS主催講演会～
「21世紀アメリカ安全保障政策の政治経済学」

開 催 日	2026年4月13日（月）
講 演 者 （敬称略）	Stephen G. Brooks （ダートマス大学（米国）公共政策大学院教授）
司 会 者	永野 護（CAPS所長・経済学部教授）
参加者数	86名

～プロジェクト研究会～

開 催 日	2026年6月7日（日）
ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ名	神川彦松日記の学際的研究
講 演 者 （敬称略）	浜岡 鷹行 （外務省外交史料室・主査）
参加者数	4名

2. 研究出張

～国内出張～

期　　間	2026年3月23日（月）～3月25日（水）
出 張 者	韓 相一（ポスト・ドクター）
行　　先	福岡
目　　的	資料調査

期　　間	2026年4月29日（水）～4月30日（木）
ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ名	ファンの心理と行動に関する研究
出 張 者	吉見 憲二（経営学部教授）
行　　先	熊本
目　　的	セミナーへの参加

3. 会議の記録

開 催 日	2026年4月21日（火）
会 議 名	第1回企画執行委員会 （ZOOMによるオンライン会議）

期　　間	2026年4月28日（火）～5月6日（水）
会 議 名	臨時（メール会議）企画執行委員会

期　　間	2026年6月2日（火）
会 議 名	第2回企画執行委員会 （ZOOMによるオンライン会議）

CAPS Newsletter　No.171
2026 年 7 月 15 日発行
編集発行：成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633　東京都武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1
☎　0422-37-3549
E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp
Web: https://www.seikei.ac.jp/university/caps/
CAPS の公式ウェブサイトは
コチラ→